

してみると、支離滅裂ということもある。逆のケースであるが、ある人の学会討論会での発言を録音テープからそのまま文章にしたら、完璧な文章になったという例も経験している。

1・2年のうちにパソコンレベルでも音声入力の実用機が発売されるだろう。とにかく右手中指一本でキーボードを操作している私にとっては、これに寄せる期待は大きい。

ワープロには辞書として数万語が記憶されているが、これは読みを漢字混じりの日本語に直すためだけの辞書である。高級な英語ワープロでは綴りをチェックする辞書をもっている。これに加えて同義語・反意語・関連語・定型的表现などの辞書が内蔵されてい

れば、文章を書く時便利だろう。「である」調、「です／ます」調の一貫性のチェックなど、作文作法上の機能も欲しい。地理学の専門語も収録されていることが必要である。さらに語彙の詳しい解説があれば完璧である。外部記憶装置がフロッピィである現在の機種では無理であるが、CDや光ディスクの普及によって、桁違いに大きな辞書を持ったワープロが間もなく出現する。岩波の広辞苑のCD版が発売されているが、残念ながらこれとワープロはまだ結合していない。

文章を書く前の段階でのアイデアを処理するアイプロ（造語）は数年後の第五世代コンピュータ待ちということになる。

（東京都立大学）

ジュネーブ瞥見

鈴木 陽子

少し古い話で恐縮だが、1982年6月にジュネーブを訪れた際、ILOの総会を傍聴する機会を得た。その時の印象について少し述べてみたい。

ILO（国際労働機関）とは、国際連合の一専門機関で、世界の労働者の経済的社会的地位の向上を目的とし、本部はジュネーブにある。

ジュネーブの街は、レマン湖の南岸からそれに続く丘の上に旧市街が広がっているが、北西の山の手地区に、数々の国際機関の高いビルが緑の中に散在し、高層アパートも所々にあって、旧市街とはまったく趣を異にする。ILO総会は、その中の一つパレ・デ・ナシオン（国連欧州本部）で毎年6月に開かれ、約1カ月続く。同時期に種々の専門会議も開かれるので、大勢の人々がジュネーブに集まることになる。

日本の代表団の1人にバッジを借りたのでフリーパスで入ることが出来た。クリーム色の重厚なパレ・デ・ナシオンの正面玄関に入ってすぐのコピーには、前日行われた全ての専門会議の記録がコピーされて並べられてあり、必要な資料をどれでも得ることが出来る。右手の大会議場は、長方形でかなり広く、コの字形に2・3階の傍聴席がある。正面舞台上の壇には、ILOの理事や幹部職員が並び、フロアに140カ国の代表が着席している。ILOが他の国際機関と違う特徴は、三者構成主義をとっていることである。即ち会議や活動には、加盟国から政府代表の他に、労働者の代表、使用者の代表が参

加する。政労使の三者で労働問題を考え、その対策をはかるという仕組みである。総会で各代表（政府代表は2人）はそれぞれ投票権を持ち、 $\frac{2}{3}$ の多数決で決まるが、立場によって意見が異なる場合も多いから、一国の中で賛成と反対に分れることも度々である。丁度ある問題に関して議決をとり始めていた。まづ最初の国の政府代表に賛否を問う。次に労働者代表に、最後に使用者代表に問う。その後をやっと次の国に移り、同様に繰返していくわけだから、議決をとるだけでも大変な時間がかかるのだ。しかも感心したのは、議決をとっていたILO職員のスペイン人の女性が、各国毎に問いかげの言語を変えていたことである。それぞれの国に応じて公用語を使いわけ、それを140カ国1人で行うのだから、国際公務員となればそれくらいの能力は必要なのかしらと恐れ入った次第である。傍聴席にも同時通訳の設備があり、質疑応答を8種類の公用語で聞くことが出来る。それは、1. オリジナル（通訳なし）、2. 英語、3. 仏語、4. スペイン語、5. 露語、6. 独語、7. アラビア語で、8番目にやっと日本語である。しかも日本語は、その当時中国語にとって代ったばかりのことだった。月並みながら、日本の国際的地位の低さ（経済的地位は別としても）を思い知らされたような気がした。

次に、大会議場の裏手に続く国連欧州本部事務局の建物の前から、連絡バスに乗ってILO本部ビルに向かう

ことにした。

ILO本部ビルは、パレ・デ・ナシオンから車で5分くらいの距離にあり、1975年に竣工した超近代的な建物である。12階建てでシンメトリーの曲線を描く細長い建物は、国際機関の中でも群を抜いてモダンである。外側のシンプルなやや冷たい感じに比べ、内部はチーク材と絨毯を沢山使い、暖みと落ち着きを感じさせる。ロビーの陳列棚の中には、例の87号条約の日本の批准書もあり、昭和40年5月21日東京皇居にて、裕仁の御名御

璽もあった。同時通訳付の大小の立派な会議室の他、豪華なラウンジがあり、又12階のギャラリーは四面がガラス張りの為眺望は絶景で、レマン湖は勿論、はるかアルプス連峰までも望むことが出来た。

フランス語しか通じないジュネーブの旧市街地から来ると、この国連村は英語が飛び交い、建物もアメリカ的(?)で、なんだか少しホッとしたのは不思議だったが、懐しく思い出される。

(14回生)

見学会のこと

滝 沢 由美子

昭和61年4月12日、お茶の水地理学会の見学会が行われた。主眼は東京都の清瀬市郷土博物館、埼玉県の三富新田であった。

清瀬市郷土博物館は、昭和53年11月、同市の基本計画にその建設が計画化されて以来検討が重ねられ、59年3月着工、同6月に開設準備室が設置されて翌60年11月開館した。その開設準備室長および初代館長は地理教育に長く携わって来られた小峯勇氏(現在帝京大教授)で、当日我々を、学芸員として現在も御活躍中の山中久子氏と共に御案内下さった。私は以前から別々の御縁でお二人を存じ上げていたのであるが、このお二人が開設の準備にあたられたのである。そんな関係で、また地理学の重要性を常に説いていらっしゃる小峯先生が中心となられているので開館される以前から興味をひかれる博物館であった。同館発行の資料を引用しつつ、以下にその内容を紹介したい。

清瀬市郷土博物館は清瀬市民文化センターの機能も兼ね備えているのが特徴であり、「先人の知恵に学ぶ」を基本テーマにすえている。先人の築いた歴史的・民俗的文化遺産を収集・保管・展示して後世に伝え、また、資料を学問的に研究するという従来の一般的な博物館活動のほかに、清瀬の自然に関する資料も収集、現在同市に残っている植物や鳥獣、昆虫等もスライドなどに収めて紹介している。また、最も重要な特色として挙げられるのが館内の“伝承スタジオ”を中心とした活動である。この部門の目標としては、地域との関係を深め、清瀬の伝統的生活様式・習慣・伝承技術等体験学習を通じて、“わがふるさと清瀬”の意識の啓発、後継者の育成に努めること、コミュニティ活動、実習活動

の活発化に努めることが挙げられている。これまでの具体的な活動の中心は、清瀬の一年間の年中行事とその時々の特的な食べ物の再現であり、月々、各集落の婦人会や有志などボランティアが中心となって、手打ちうどん、まゆ玉、焼だんご、ゆでまんじゅう、草餅などを作り、茶つみ、茶もみ、麦棒打ち、竹ぼうき作り、わら仕事、養蚕、糸とり、機織りなどの作業が、講習会も含めて一般市民の参加のもとに行なわれてきた。これらの活動は先人の技術を伝承すると同時に、それが長い間かかって人間の知恵と風土とのかゝりの中から生まれたものであることを参加者が認識するための体験学習ともなっている。また、古い道具は保存・展示するのみの博物館がほとんどという中で、麦棒打ち、機織り等がかつての古い道具が実際に使われている。これは、使う技術を伴わない民具の保存は、その価値の多くを失ってしまう、また道具の保存の意味はそこに込められた人類の叡智を保存することでもありその叡智は道具を使って初めて表われるものであるとの考えに基づいている。これも先人の知恵に学ぶことを具体化した活動である。小学校3年生の社会科では、自分達の町を知ることがテーマ(まさに地理学のテーマである)となっている。同館では入口ロビーに空中写真が実体視出来るようにセットされ、市全体を実感をもって視野に入れることが出来、統いて郷土の自然の様子、地域の発展過程を学習出来る場を与えている。また、一部の3年生に限られるが、博物館に一泊して榎割り、水汲み等一昔前の生活をし、土器を作成するなどの体験学習の場も用意されている。同市は東京の郊外に位置し、いわゆる新住民の増加が顕著であるが、現在、伝承スタジオ